

## 「遊ぶように学び／学ぶように遊ぶ」遊学につぼんシンポジウムについて

### 20 世紀日本における観光の記憶

昭和の終わりから平成の初めにかけて「リゾート」という言葉に象徴される観光ブームがありました。ただ、その主役は「リゾートマンション」という名の「定住を前提としない」集合住宅や別荘地の購入を促進する不動産ビジネスであって、観光そのもののへの大きな実需を呼び起こすものではありませんでした。

その当然の結果として、不動産投資への熱が冷めると、いわゆる「リゾート」、それを法的に保証するかに思われた「リゾート法（総合保養地域整備法）」への熱が冷めることで観光そのものへの関心も急速にしばみしました。

その結果、今日、そうした時代に建設されたリゾートマンション、造成された別荘分譲地が「負の社会遺産」として問題化している事例は少なくありません。

### レジャーと共にあった琵琶湖の観光

こうした状況のもと、琵琶湖とその周辺も、いわゆる「一過性の大衆的レジャー」で賑わったものです。その典型は、浜大津港から近江舞子まで多くの水泳客を運んだ遊船会社、江若鉄道に揺られて出かける比良山系の登山やスキーなどの隆盛といったものでしょう。

それが近年ではウィンドサーフィンやジェットスキーのブーム、バスフィッシングブームなどに置き換わっているのかも知れません。

### 琵琶湖が目指すべき観光とは？

一方、日本政府は最近、外国人観光客の誘致に焦点をしばりながら、その目標値を従来の 2000 万人から 2 倍の 4000 万人に拡大しました。こんなことは少し前までは考えることすらできなかったはずです。

しかし 2020 年の東京オリンピックを控えて、各地の空港機能や LCC 就航の急速な拡大、容易に国境を超えて広がる予約サイトの普及などを勘案すると、実現可能な数値目標だということになるのでしょうか。無論そのためには国際紛争などが勃発しないことが必要なことはいうまでもありません。

今ひとつ、現状の日本人に視点を定めてみると、前項で述べたような、仕事や労働に支配された多忙な日常生活からの一時的な逃避でしかない、ひたすら消費的な「レジャー」に依存する観光だけでは社会的なニーズやウォンツに応えることがむづかしくなっています。

このことを琵琶湖に則して考えてみると、琵琶湖とその周辺地域に潜在している包括的なポテンシャルを活かして、その魅力を最大限に発揮する方途を探る必要があるということになるかと思えます。

しかしながら実際には今なお、ひと昔前の「寸暇を惜しむ」「安かろう悪かろう」「大量画一」「近隣ビジネス」型のレジャー商品ばかりが提供され続けているようです。

ただ他方、日本における観光に、多数の遠来の外国人観光客が参入し始めたことなどが作用して、じっくりと時間をかけて楽しむ、本来の「観光」の名に値する高い価値を秘めた多様なニーズに応える試みが求められているように思われます。

こうした状況のもとで、琵琶湖とその周辺地域がめざすべき観光のありようを考えてみましょう。すると訪れた人が、この地域の人々との出会いと共に、この地域において培われてきた価値ある独自の自然と生活と文化の「光」に浴し、それらを心身ともに楽しみ、彼らの普段の生活をより楽しく好ましいものに変える契機となるような体験を提供することではないかと思われます。むろん同時に、琵琶湖とその周辺地域が提供してきた多様なレジャーの楽しみもまた、巧みに提供していく必要のあることはいうまでもありません。

## ニッポン観光における琵琶湖の価値

このシンポジウムでは琵琶湖とその周辺地域が秘めている多大なポテンシャルを改めて捉え直し、それらを活かしながら、前項で述べた価値ある未来の観光のスタイルを、「遊ぶように学び」「学ぶように遊ぶ」

と捉えて、未来を切り開く新しい価値ある「ものがたり観光」のイメージを提示することをめざしたいと思います。

なお、その際、琵琶湖とその周辺地域の自然・生活・文化を、さまざまな手法を用いて展示し、多様な普及活動を展開している琵琶湖博物館とそのネットワークを最大限に活かすことで、それらを踏まえた「ものがたり観光」のイメージを提示することが実現されるよう努めようと考えています。

.....

### 参考資料①：「ものがたり観光」とは何なのか：学会の設立趣旨

訪れる人と、それらの人を迎える地域や人々の間の「やりとり」は、さまざまな「ものがたり」を生みます。一時の消費・発散・通過だけではない、人と人、人と地域の「かかわりあい」から立ち上がってくる何かをすくい取る「観光のかたち」を構想し、その成果を社会に還元したいものです。それが「ものがたり観光行動学会」のめざすところ

です。  
「国の光を観る。もって王に賓（ひん）たるに利あり。賓たらんことを尚（こいねがう）なり」——ここで「国の光」とは、豊かな自然や人々の暮らし、優れた文化のことでしょう。それに触れた王は、心身ともに充実し、ひるがえって「新たな光」を発し始めるといわけです。「観」は「見る」だけではなく「示す」をいう意味をもはらんで

いたのです。

それが今、わたしたち庶民の楽しみになりました。美しい風景、地域ごとに特有の豊かな暮らし、おいしい食べ物、面白い芸能や芸術、未知の人との出会いなどは、すべて「観光」なのです。そんな体験は、おしゃべり、写真や絵、詩歌や紀行文などを通して、ほかの誰かに伝えたくくなります。

ここに新しい「ものがたり」が誕生します。それだけではありません。こうした体験をきっかけに、ふだんの暮らしを、ちょっと楽しく快い方向に変化させたくなるかもしれません。これもまた「観光」の名で呼びたいものです。

それは、訪問者だけの特権だけではありません。しばしば訪問者は、わたしたちみずからが暮らす場所の未知の価値を教えてください。すると、その価値に磨きをかける道筋が見えてきます。

こうして、新たな「光」を示すための「ものがたり」が生まれます。それに、生身の人と人との親密な出会いが、いきいきとした命を吹き込んでくれます。

これまで観光地といえば、あるとき人々がどっと押し寄せ、まもなく忘れ去られて寄り付く人もいなくなる場所のことでした。そんな観光地のありようを変えたいものです。べつだん世界遺産や国宝がなくても、すべての町や村には、必ず人を惹きつける何かがあります。特有の自然や風物、歴史や文化、物産や暮らしのなかに、訪れる人と暮らす人を、ともに元気づける「ものがたり」を見つけることで、そのことが実現できます。

#### **参考資料②：ものがたり観光行動学会会員 行動の道しるべ**

- ◇ 会員は、わざわざ訪れた場所や住んでいる場所の区別なしに、そのときに「居る場所」において、風景の美しさ、暮らしや物産の面白さや珍しさ、人との出会いの楽しさなどを見つける「まなざし」を持ち続けます。
- ◇ 会員は、そんな「まなざし」がもたらしてくれる体験を、すべて「観光」と捉え、何かの表現活動を通して、新しい「ものがたり」づくりに昇華します。
- ◇ 会員は、生み出された「ものがたり」をもとに、それぞれの場所の楽しみが増大し、人々が快く暮らし、過ごせる工夫を凝らし、それを「具体的な行動」に移します。
- ◇ 会員は、上記3項目にかかわる出来事を対象とする研究を試み、その成果を、折に触れて研究論文や評論、エッセイや紀行文などの形式にまとめて発表します。
- ◇ 会員は、これら4項目の活動に関する情報交換や討論のために、さまざまな形式で開催される学会の会合に積極的に参加します。